

パニウム-第十四番

神殿の試練の鍵としての失望

Jeff Pippenger

2026-02-18

聖所の主題は、第三天使のメッセージの初めにおいて、1844年10月22日の失望を説明する「鍵」であった。そして、第三天使のメッセージの終わりにおける神殿の試練に関する聖所のメッセージを説明する「鍵」となるのは、失望の主題である。

わたしはあなたに天の御国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐものは何であれ、天においてもつながれる。あなたが地上で解くものは何であれ、天においても解かれる。
マタイによる福音書16章19節

2001年9月11日が、アメリカ合衆国における緊急通報の象徴である「911」と符合して「9/11」として理解されているという事実は、万物を設計された方によって意図されたものであった。2020年7月18日の失望を理解することこそが、十四万四千人の運動がそのようなものとして認識されることを可能にする。しかし、それは、イエスが二千年前になされたのと何ら変わることなく、今日も自然をもって霊的なことを表しておられるのだと見たいと願う者にのみ、そうと認められる。「20/20」の視力は人が持ちうる最良のものであり、2020年の失望は、十人の乙女の預言的歴史において神殿が認識されようとする道標である。

「マタイ25章の十人の乙女のたとえは、アドベンチストの人々の経験も示している。」『大いなる論争』393。

20/20の視力は、根本的諸真理により象徴される回顧的洞察と結び合わされるなら、なおいっそう優れている。パウロは「預言者たちの霊は預言者たちの霊に服する」と教える。したがって、マタイにおけるおとめたちは、ヨハネが十四万四千人として指し示すおとめたちと同一であり、またヨハネは黙示録144において彼らをおとめであると述べている。

彼らは女に汚されておらず、童貞である。彼らは小羊が行くところならどこへでも従う者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にささげられた初穂となった。黙示録14:4

秋季の初穂は、小羊に従って神殿に入る処女たちであり、神殿を理解するための「鍵」は2020年の失望である。

また、わたしはダビデの家の鍵を彼の肩に置く。彼が開ければ、閉める者はなく、彼が閉めれば、開ける者はいない。イザヤ書 22:22。

もしアドベンチストが十四万四千人のうちに数えられるのであれば、その者は、預言上の必然として、成就しなかった公的な予言の公表によって引き起こされた失望を経験していなければならない。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

ダニエル書11章15節におけるパニウムの戦いは、16節へと導く戦いであり、同16節はアメリカ合衆国における日曜法を特定している。

こうして、北の王は来て土壘を築き、最も堅固に囲まれた町々を攻め取る。南の軍勢はこれに抗しえず、南の王の選り抜きの人たちもまた抗しえない。抗する力は少しもない。ダニエル書11章15節

この節では、アメリカ合衆国が、ロシアとその選民を打ち破る。しかし次の節では、聖書預言における第四の王国としてローマが台頭し、世界征服の第一歩としてユダとエルサレムに標を付す時、その興隆に対抗し得る者はだれもない。十六節で文字通りの栄光の地に立つことにより、文字通りのローマの権威の象徴は、その地の内にあった。ゆえにこれは、四十一節を予型している。すなわち、アメリカ合衆国という霊的な栄光の地に、霊的ローマの権威の印が強制される時である。

黙示録十三章の地から上ってくる獣の二本の角は、共和主義とプロテスタント主義を表す。ダニエル書十一章十五節において、アンティオコス・マグヌス、すなわちアンティオコス三世（大アンティオコス）は、プトレマイオス朝によって表される南の王国を打ち破る。アンティオコスはドナルド・トランプを表し、南の王はロシアを表す。パニウムの戦いは、アメリカ合衆国とロシアおよびロシアの選民との間の戦いであり、その戦いにおいてはアンティオコスが勝利したが、その後、彼の王国は文字通りのローマ、すなわち十四節の権勢に征服された。これが、地から上ってくる獣の共和主義の角の外的異象を確立する。内的異象は、地から上ってくる獣のプロテスタントの角によって表される。両方の角はいずれもパニウムの戦いに臨んでいる。というのも、ペテロがヨエル書からの彼のメッセージを携え、プロテスタントとしてそこにいるからである。

二百五十年

地の獣の二つの系統を考察すると、1776年に地の獣がその台頭を開始し、1798年には（二十二年後）、ヨハネの黙示録第十三章の海の獣が致命的な傷を受け、地の獣が聖書預言における第六の王国として統治を開始したことがわかる。二百五十年後の2026年、私たちは、2025年5月8日に始まった神殿内部の試験に目覚めた。

この「250」年はアンティオコス・マグヌスとも関連している。紀元前457年の勅令を起点として、その勅令から二百五十年を数えると紀元前207年に至るが、これはパニオンの戦いの七年前であり、またプトレマイオスがラフィアの戦いでアンティオコスを破ってから十年後である。これはダニエル書11章11節に表されている。ダニエル書11章11節は、いうまでもなく、プロテスタントの角の内的線である黙示録11章11節と符合する、共和政の角の外的線である。ダニエル書と黙示録は同一の書物であり、黙示録は封印を外的予言の象徴として、諸教会を並行する内的予言の象徴として用いる。

キュロスは三つの勅令すべてを象徴する。なぜなら、第一と第二なくして第三はあり得ないからである。

「その勅令はエズラ記第七章、12-26節に見いだされる。その最も完全な形においては、それはペルシアの王アルタクセルクセスによって紀元前457年に発布された。しかし、エズラ記 6:14 には、エルサレムにおける主の宮が、『クロス、ダリヨス、およびペルシアの王アルタクセルクセスの命令〔欄外訳「勅令」〕によって』建てられたと記されている。これら三人の王は、その勅令を起こし、再確認し、完成することによって、2300年の始まりを示すために預言が要求する完全性へとそれをもたらした。勅令が完成した時である紀元前457年をその命令の年代とすると、七十週に関する預言のあらゆる規定が成就していたことが明らかになった。」『各時代の争闘』326頁

紀元前457年にキュロスによって表象される三つの勅令から起算すると、「250」年は、プトレマイオス四世が大アンティオコスを破った紀元前217年のラフィアの戦いと、その後アンティオコスが第十五節におけるパニウムの戦いでプトレマイオスを破った紀元前200年とのあいだの歴史の中で終結する。

この線は、アンティオコス・マグヌスをドナルド・トランプに照応させる。聖書預言における第六の王国の始まりに当たる1776年から1798年には、「22」年の期間があり、それは第六の王国の興起を表している。その「22」年はまた、第六の王国の歴史の終わりに当たる2001年から2023年において、「22」という数で表象される歴史をも例証している。「22」は、共和主義の外的な角とプロテスタント主義の内的な角を有する地の獣である聖書預言の第六の王国の歴史の中で成就される、神性と人性の結合の象徴である。

「22」で表される合一によってキリストが成就する働きは、至聖所におけるキリストの最後の働き、すなわち罪の拭い去りによって表されるものであり、ヨエル（およびそれに対するペテロの靈感による注解）によれば、これは後の雨の注ぎの時に行われる。

それゆえ、悔い改め、立ち返れ。主の御前から慰めの時が来るときに、あなたがたの罪が拭い去られるように。使徒言行録 3:19。

罪を拭い去ることは、天の大祭司の最後の務めである。

古代においては、民の罪は信仰によって罪のためのいけにえに負わせられ、その血によって、型において地上の聖所へと移された。同様に、新しい契約においては、悔い改める者の罪は信仰によってキリストに負わせられ、実際に天の聖所へと移される。そして、地上の聖所における型的清めが、それを汚した罪の除去によって成し遂げられたように、天の聖所における実際の清めも、そこに記録されている罪の除去、すなわち抹消によって成し遂げられるのである。しかし、これが成し遂げられる以前に、記録の書を精査して、罪の悔い改めとキリストへの信仰によって、だれが彼の贖いの効益に与る資格を有するかを決定しなければならない。ゆえに、聖所の清めは、調査の業、すなわち審判の業を含む。この業は、キリストがご自分の民を贖うために来られる以前に行われなければならない。というのは、彼が来られるとき、その報いは彼と共にあり、おのおののわざに応じて各人に与えるからである（黙示録22章12節）。大争闘、421頁。

1844年10月22日に始まった業は、「真夜中の叫び」の最高潮において開始し、またその業は「真夜中の叫び」の最高潮において完結するが、その最高潮をペテロは、罪がぬぐい去られる時期と特定しており、これは生ける者の審判の時期を画するものであって、すなわち「さわやぎの時」が到来するときである。

調査審判の働きと罪のぬぐい去りは、主の再臨に先立って成就されるべきである。死人が書物に記されている事柄に基づいてさばかれるのであるから、各人の事案が調査されるその審判の後までは、人間の罪がぬぐい去られることは不可能である。しかし使徒ペテロは、信者の罪は「主の御前から回復の時が来るとき、また主がイエス・キリストを遣わされるときに」ぬぐい去られると明確に述べている。使徒行伝 3:19, 20. 調査審判が終結するとき、キリストは来られ、その報いを携えて来られ、各人のわざに応じてそれを与えられるであろう。『各時代の争闘』, 485.

『慰めの時』は、また『万物の回復の時』でもある。

それゆえ、悔い改めて神に立ち返れ。そうすれば、主の御前から慰めの時が来るとき、あなたがたの罪は拭い去られるであろう。そして、かつてあなたがたに宣べ伝えられていたイエス・キリストを、主はお遣わしになる。天は、万物の回復の時が来るまで、この方を受け入れていなければならない。この回復の時とは、神が世の初め以来、その聖なるすべての預言者たちの口を通して語ってこられたことである。使徒行伝 3:19-21.

『潤いの時』は、『イエス・キリスト』が遣わされるときに起こるものであり、『主の御前から』来る。1840年8月11日に黙示録第十章の天使が降臨したとき、ホワイト夫人は、その天使が『イエス・キリスト以外の何者でもなかった』と明言した。1844年10月22日にキリストが開始された御業は、1840年から1844年に至る歴史によって導き入れられた。ホワイト夫人はその歴史を『神の力の栄光ある顕現』であったと述べ、その同じ歴史をペテロの時代のペンテコステの季節と対応づけながら、さらにその二つの預言的歴史の線を用いて、その栄光によって地を照らす黙示録第十八章の天使の降臨を将来に向けて指し示している。

第三天使のメッセージの宣言に加わる天使は、その栄光によって全地を照らすであろう。ここには、世界的規模でこれまでにない力をもつ働きが予告されている。1840年から44年の再臨運動は、神の力の栄光に満ちた現れであった。第一天使のメッセージは世界のあらゆる宣教地にまで運ばれ、いくつかの国々では、16世紀の宗教改革以来いづれの地でも目撃されたことのないほどの宗教的関心が起こった。しかし、これらは、第三天使の最後の警告のもとで起こる力強い運動によって、なおいっそう凌駕されるだろう。

その働きはペンテコステの日の出来事と同様になるだろう。福音の始まりに、聖霊の注ぎによって尊い種が芽生えるために「初めの雨」が与えられたように、その終わりには収穫を成熟させるために「後の雨」が与えられる。「そうすれば、私たちは主を知ることが求め続けて、主を知るようになる。主の現れは暁のように確かで、主は雨のように、地に降る後の雨と初めの雨のように、私たちのところに来られる。」ホセア書 6:3。「シオンの子らよ、喜び楽しめ、あなたがたの神、主にあつて。主はあなたがたに初めの雨をほどよく与え、あなたがたのために、雨、初めの雨と後の雨を降ら

せてくださる。」ヨエル書 2:23. 「終わりの日に、と神は言われる、わたしの霊をすべての人に注ぐ。」、「そして、主の名を呼ぶ者はだれでも救われる。」使徒行伝 2:17、21.

福音の偉大な働きは、その始まりを特徴づけた神の力の顕現よりも小さな顕現をもって閉じられることはない。福音の開幕における「前の雨」の注ぎの際に成就した預言は、その終わりにおける「後の雨」において再び成就する。ここに、使徒ペテロが次のように言って待ち望んだ「さわやぎの時」がある。「それゆえ、悔い改めて立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られる。主の御前から『さわやぎの時』が来るとき、主はイエスを遣わしてくださる。」使徒行伝3章19、20節。『各時代の争闘』611ページ。

1840年から1844年にかけての再臨運動は、キリストがその聖所を清める御業の開幕をもたらした神の力の栄光ある顕現であった。その歴史は、黙示録十四章の第一の天使として象徴されているイエスが、黙示録十章において示されているとおり、1840年8月11日に降臨したときに始まった。そのときに始まった神の力の顕現は、調査審判の開始へと高まっていっていき、したがって、やがて調査審判の終結へと高まっていく神の力の顕現を予表した。終末期は9/11に始まった。そのとき、神の御手のひと触れによってニューヨークの巨大建造物が打ち倒された際、イエスは再び黙示録十八章の天使として降臨し、調査審判の御業は死者に関するものから生者に関するものへと移行した。雨は、イエスが遣わされるときに到来する。

イエスは、受けるためには求めるように教えた。また、ゼカリヤは、後の雨の時に後の雨を求めるよう命じている。したがって、ゼカリヤの指示に従うためには、自らが後の雨の時にあることを知っていなければならないのは明らかである。

あなたがたは、後の雨の時に、主に雨を求めよ。そうすれば、主は輝く雲を造り、あなたがたに驟雨を与え、各人に野の草を与えられる。ゼカリヤ書 10:1.

9/11に、イエスは『ヨハネの黙示録』第十八章の天使として降りて来られ、後の雨が降り始めた。だが、それが降るのは、「後の雨を求めよ」というゼカリヤの命令に従う者、すなわち「刷新の時」と万物の回復が到来したことを真に理解している者に限られる。魂は、後の雨の預言的時期が到来したことを「認識」しなければならない。

「私たちは後の雨を待つてはなりません。後の雨は、私たちの上に降る恵みの露と雨を認め、受け入れるすべての者の上に、今まさに注がれようとしているのです。私たちが光のかけらを拾い集め、私たちが神に信頼することを喜ばれる神の確かな慈しみを大切にすれば、すべての約束は成就します。[イザヤ書61章11節引用。] 全地は神の栄光で満たされるのです。」セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、984ページ。

9/11に「さわやぎの時」が始まり、生ける者の罪のぬぐい去りも始まった。その裁きは、三段階から成るアブラハムの契約の第一の要項と符合している。その第一の要項とは、主がイスラエルをエジプトの奴隷状態から導き出されるとき、主はご自身の契約の民と、彼らが寄留者また旅人として住んでいたその国とを、共に裁かれるというものであった。最初の契約の民は、最後の契約の民である十四万四千人を予表していた。その預言的な民

は、地の獣のプロテスタントの角として裁かれ、同時に地の獣の共和主義の角も裁かれる。

共和制の角に対する審判は、その歴史の終末に到来するが、その終末とは日曜法である。日曜法は、16節の成就、すなわち紀元前63年にローマがユダを支配下に置いた出来事において象徴されている。これは、一部の歴史家によれば、贖罪日に起こった。

アンティオコス大王は、10節から15節においてアメリカ合衆国を表している。ロナルド・レーガンは10節の戦いで勝利を収め、これは40節におけるソビエト連邦の崩壊を予表していた。イザヤ書8章8節は、ダニエル書11章の10節と40節に表されている同一の戦いを指し示しており、これら三つの並行する節によって、11節のラフィアの戦いの勝者としてロシアを同定することができる。

十一節におけるラフィアの戦いは、南の王（ロシア）と教皇権の代理勢力（ウクライナ）とのあいだでウクライナにおいて起こる戦争を予表していた。この戦争は、南半球出身の最初の教皇の時代に、オバマ政権によって開始された。その教皇はまたアメリカ大陸出身としても初であったが、南アメリカの出身であった。「南」はグローバリズム、心靈主義、共産主義の象徴であり、十一節の戦争が到来したとき、アメリカ大陸出身の最初の南方の教皇は、グローバリストのオバマ大統領と提携した。十節におけるアメリカ合衆国としてのレーガンは、保守的な教皇と秘密同盟を結んだ。ついで、グローバリストの教皇の時代に、グローバリストの大統領によってウクライナのナチスが用いられた。トランプ政権下のアメリカ合衆国はいまや、北アメリカ出身として初めての、いわゆる保守的な教皇と公然たる関係にある。

レーガンは、第十節の戦いにおいて、聖書預言の反キリストと秘密裏に同盟していた。オバマは、ローマ教皇もまたオバマ同様にグローバリストであった時期に、第十一節の戦いを開始した。トランプは現在、レーガンに並行する教皇と公然の関係にあり、ただし、当初の秘密同盟が今や公然の同盟となっている点が例外である。三人の教皇と三人の大統領は、第十節・第十一節・第十五節の三つの戦いに符合している。

「ローマ教会は、その抜け目なさや狡猾さにおいて驚くべきものである。彼女は来たるべきことを読み取ることができる。プロテスタント諸教会が偽りの安息日を受け入れることによって彼女に敬意を表しており、しかも彼女自身が過ぎ去った時代に用いたまさにその手段によって、それを強制しようと備えているのを見て、彼女は時機を待っている。真理の光を拒む者たちは、なおも、この自らを無謬と称する権力の助けを求めて、彼女に由来する制度を高めようとするであろう。この働きにおいて、彼女がいかに進んでプロテスタントを助けに来るかは、推し量るに難くない。教会に従わない者たちをどのように扱うべきかを、教皇制の指導者たち以上によく理解している者がほかにいるであろうか。」

「ローマ・カトリック教会は、その全世界にわたるあらゆる分枝をもって、教皇庁の支配の下にあり、かつその利益に奉仕するよう意図された、一つの広大な組織を形づくっている。地上のあらゆる国にいるその幾百万の信徒は、自らを教皇への忠誠に拘束された者とみなすよう教えられている。彼らの国籍が何であれ、またその政府がいかなるものであれ、彼らは教会の権威を他のすべての権威にまさるものと見なすべき

である。たとい国家への忠誠を誓約する宣誓を行うとしても、その背後にはローマへの服従の誓約があり、ローマの利益に敵対するいかなる誓約からも彼らを解放するのである。

歴史は、巧妙にして執拗な努力によって諸国の政務に入り込み、ひとたび足場を得るや、君主や人民の破滅をも顧みず自らの目的を推し進めてきたことを証言している。1204年、教皇イノセント3世はアラゴン王ピーター2世から、次のような異例の誓約を取り付けた。「我、アラゴン人の王ピーターは、我が主たる教皇イノセント、そのカトリックの後継者たち、およびローマ教会に対して、常に忠実かつ服従であることを宣言し、約束する。また、カトリック信仰を擁護し、異端の邪悪を弾圧しつつ、彼への服従のもとにわが王国を忠実に保持する。」-ジョン・ダウリング『ローマニズムの歴史』第5巻 第6章 第55節。これは、ローマ教皇の権能に関する次の主張、すなわち「彼が皇帝を廃位するのは合法である」および「彼は不正な支配者に対する臣民の忠誠義務を免除することができる」という主張と一致している。-モシャム 第3巻 11世紀 第2部 第2章 第9節 注17。

そして忘れてはならないのは、ローマは決して変わらないことを誇りとしているということである。グレゴリウス7世とインノケンティウス3世の原則は、今もなおローマ・カトリック教会の原則である。もし力さえあれば、ローマは過去の諸世紀と同じ勢いで、それらを今なお実行に移すだろう。プロテスタントは、日曜日を高揚させる取り組みにおいてローマの援助を受け入れようと提案するとき、自分たちが何をしているのかをほとんど理解していない。彼らが自らの目的の達成に余念がない間に、ローマは自らの権勢を再興し、失われた覇権を回復しようと狙っている。ひとたび合衆国において、教会が国家の権力を用いる、あるいはそれを支配することができるという原則、宗教的遵守が世俗の法によって強制されうるといふ原則、要するに教会と国家の権威が良心を支配するものとされるという原則が確立されるなら、この国におけるローマの勝利は確実となる。

神の御言葉は、差し迫った危険を警告している。この警告を顧みなければ、プロテスタント世界は、罠から逃れるにはあまりに遅くなってから初めて、ローマの真の企図が何であるかを知ることになるだろう。ローマは沈黙のうちに権勢を増しつつある。その教義は、立法府の議場においても、諸教会においても、また人々の心のうちにおいても、その影響力を及ぼしている。ローマは、その高大にして巨大な建造物を築き上げており、その秘められた奥まったところにおいて、かつての迫害が繰り返されるであろう。人目を忍び、疑念を抱かせることもなく、やがて一撃を加えるべき時に備え、自らの目的を推し進めるため、ローマはその勢力を強化している。ローマが求めるのは有利な地歩のみであり、それはすでにローマに与えられつつある。われわれはまもなく、ローマ的要素の目的が何であるかを見、そして身をもって感じるようになるであろう。神の御言葉を信じ、これに服従する者は、誰であれ、そのゆえにそしりと迫害を被るであろう。The Great Controversy, 580, 581.

2016年にトランプが当選し、その後、バイデンに代表されるグローバリストが2020年の選挙を不正に奪取したが、それは20/20の視力を有する者にのみ認識されるのである。第十三節において、ドナルド・トランプは2024年に「復帰」し、これまでになく大いなる権勢を帯びて、黄金時代への備えと、第十五節におけるパニウムの戦いへの備えとを開

始する。ついで、教皇レオが2025年にその異象を確立するために到来した。彼は、第十節から第十五節にわたる三つの戦いに結び付けられた第三の教皇であり、また、それらの戦いの三人の大統領にも結び付けられている。第一と第三の教皇と大統領は保守的と見なされ、中間の教皇と大統領はグローバリストであった。最初の同盟は秘匿されていたが、最後の同盟は公然である。というのも、それは第十四節において、終わりの日の預言の外的異象を確立する象徴として表象されているからである。

2023年12月31日、第一の勅令の働きを型とする第一の御使いの働きが、基礎を据え始めた。基礎的な試験は、十四節において幻を実現させるのはローマであるとウィリアム・ミラーが特定したことが正しいのか誤りなのかをめぐるものであった。終わりの日々の預言的幻を実現させる象徴としてローマを特定したというミラーの見解は、幾つかの点において、ミラーのあらゆる基礎的真理の中でも最も重要なものである。ミラーがいかにして一定の理解に到達したのかは、彼の時代と状況に聖別された論理を適用することからしか導き出せないが、彼のいくつかの預言的発見については、なぜその理解に至ったのかを示す、きわめて具体的な証言が存在する。彼の理解のうち最も根本的なものは、幻を実現させるのはローマであるという特定であった。

ミラーは、ダニエル書において何が「取り去られた」のかを理解しようとしてどのように探求したかを、直接証言している。彼は、答えをどこで見いだしたかを明確に示すのみならず、捜し求めていた宝石を発見したときの喜びについても語っている。アポロス・ヘイルは、ミラー自身の著作に対する注解を記録しており、以下の一節において、ミラーがいかにして預言の学徒となったかを明らかにしている。ミラーは、1798年に封印が解かれて顕れた光の使者として、ダニエルが、書が「封印が解かれる」ときに「悟る」と呼んだ「賢い者たち」の聖なる範例である。ミラーがいかにして聖書研究へと導かれたかに関する彼の証しは、万事を支配するお方が目的をもって示された模範である。ミラーの形成の過程に十分な注意を払われたい。というのも、ミラーは、たとえ人が彼のように誤謬の闇から出てくる者であっても、知識の増し加わりを悟る「賢い者たち」の模範だからである。

1816年5月、私は罪の確信に至らされ、ああ、何と恐怖が私の魂を満たしたことか！ 私は食を忘れた。天は青銅のように、地は鉄のように思われた。私はこのような状態のまま十月まで過ごしたが、そのとき神が私の目を開いてくださった。そして、ああ、わが魂よ、私はイエスが何という救い主であるかを見いだしたのだ！ 私の罪は、重荷が落ちるように、私の魂から落ちた。そしてそのとき、何と聖書が私には明白に思われたことか！ それはすべてイエスについて語っていた。彼はすべての頁、すべての行におられた。ああ、あれは何と幸いな日であったことか！ 私は直ちに天の故郷へ帰りたいたいと願った。イエスは私にとってすべてであった。私は自分が彼を見たように、ほかのすべての人々にも彼を見させることができると考えたが、思い違いであった。

私が自然神論者であった十二年間には、見つけうるかぎりの歴史書をすべて読んだ。しかし今や私は聖書を愛するようになっていた。聖書はイエスについて教えてくれたのだ！ それでもなお、私には聖書のうちに相当に難解な部分が多く残っていた。1818年か19年のこと、私はある友人を訪ねて語り合っていた。彼は、私が自然神論者であった頃から私を知り、当時の私の語ることを聞いていた者であったが、やや含みのあ

る調子で、私が自然神論者であった折に異議を唱えていた古い聖句を指して、「この聖句やあの聖句を、今はどう思うか」と問いかけた。私は彼の意図を悟り、「時を与えてくだされば、それらが何を意味するのかお話ししましょう」と答えた。「どれほどの時間が要するのか。」——「分かりません。しかしお伝えします。」と私は答えた。神が理解不能な啓示をお与えになったとは、私には信じられなかったからである。そこで私は、聖霊が何を意味しておられるのかを見いださうと信じ、聖書を研究する決心をした。ところが、この決心を固めるやいなや、こういう思いが胸に浮かんだ——「もし理解できない箇所に出会ったら、どうするのか。」

そのとき、聖書研究のこの方法が私の心に浮かんだ——すなわち、かかる箇所の語を取り上げ、聖書全体にわたってその語をたどり、このようにしてその意味を見いださうというのである。私はクルーデンのコンコルダンス〔1798年に購入〕を持っており、これは世界で最も優れたものだと考えている。そこでそれと自分の聖書を手に取り、机に向かって腰を下ろし、少し新聞に目を通すほかは何も読まなかった。私の聖書が何を意味しているのかを知ろうと固く決意していたからである。私は創世記から始め、ゆっくりと読み進めた。そして、理解できない聖句に出会うたびに、その意味を知るために聖書全体を繙いて調べた。このようにして聖書を読み通したのち、ああ、なんと真理は明るく栄光に満ちて現れたことか。私は、これまであなたがたに宣べ伝えてきたことを見いだした。私は、七つの時が1843年に満了するとの確信を得た。次いで二千三百日の箇所に至ったが、それもまた私を同じ結論へと導いた。しかし、救い主がいつ来臨されるかを見いださうとは少しも思わず、またそのことを信じることもできなかつた。けれども、その光はあまりにも力強く私に迫り、私はどうしてよいかわからなかつた。ここで私は思った——拍車と尻帯を身につけねばならない。聖書より先に走りはずせ、またそれに後れも取るまい。聖書が教えるところは何であれ、それを堅持しよう。しかしそれでもなお、私には理解できない聖句がいくつか残っていた。

彼の聖書研究の一般的方法については以上である。別の折に、彼は、当面の本文-「the daily」の意味-の解釈を確定する自らの方法をこう述べた。「私は読み進めた。すると、それが見出されるのはダニエル書以外にはなく、ほかには一例もなかつた。そこで、私はそれと結びついている語-『取り去る』-を取り上げた。『彼は「the daily」を取り去る』『「the daily」が取り去られる時から』等々である。読み進めたが、この聖句については何の光も見いだせないのではないかと思った。ついに私はテサロニケ人への第二の手紙2章7-8節に至った。『不法の秘密はすでに働いている。ただ今妨げている者が、道から取り除かれる時まで、今なお妨げ続けるであろう。その時、かの不法の者が現れるであろう。』等々。その聖句に至ったとき、ああ、何と真理が明晰に、しかも栄光に満ちて現れたことか。そこにある！これこそ「the daily」だ！さて、では、パウロは『今妨げている者』すなわち『妨げる者』によって何を意味するのか。『不法の人』および『その不法の者』によって意味されているのは教皇制である。では、教皇制が顕わにされるのを妨げているものは何か。そう、それは異教である。そうであれば、「the daily」は異教を意味するに違いない。」
アポロス・ヘイル『セカンド・アドベント・マニュアル』66頁。

ミラーの研究が、人間的なものと神的なものの双方による摂理的導きのもとにあったことは、記録に残されている。彼の旧友が彼を促し、彼に来た思念は天使ガブリエルの声であったが、ホワイト姉妹は“line upon line”との語を用いて、ミラーを繰り返訪れ

たその天使がガブリエルであると特定している。彼は、「七たび」を最初の発見として特定し、ついで「二千三百」を「七たび」に対する第二の証言として特定した。というのも、それらは双方とも1843年に終結したからである（彼は当初そう信じていた）。これら二つの預言は、彼のアルファとオメガの発見であり、ミラーに関わる預言的關係の枠内において、のちにサミュエル・スノウが、「第七の月運動」を開始させた「真夜中の叫び」のメッセージによって訂正することになる誤りを指し示している。真夜中の叫びの運動は、エクセターのキャンプ集会を後にしたとき、「第七の月運動」であった。というのも、それは第七の月の第十日における主の来臨を指し示しており、その日は1844年には10月22日に当たったからである。

第二の天使が力を得ることを生み出す誤謬は、七つの時と二千三百年が一八四三年に共に終結したというミラーの当初の理解によって表されている。当該箇所において次に論じられている教理は、ミラーがいかにして異象を確立する象徴としてローマを特定するに至ったかである。アドベンチストの歴史教師たちは、ウィリアム・ミラーの預言理解のすべてが、彼が二つの荒廃させる権力を特定したことに基づいていると指摘する。彼は、その二つの荒廃させる権力を異教ローマと教皇ローマであると理解し、さらに、ダニエル書の「常なるもの」が異教ローマを指すことを理解したとき、テサロニケ人への第二の手紙の中にその二つの権力を見いだした。ホワイト姉妹はミラーが天使たちの度重なる訪問を受けたことを私たちに知らせているが、そのミラーが提示したあらゆる預言のモデルは、ローマが異象を確立するという彼の理解に基づいていた。例外は一つもない。

2023年12月31日から、ユダ族の獅子がイエス・キリストの黙示の封印を解いておられる。その時点から基礎的な試練が始まり、2025年5月8日にアメリカ合衆国出身の最初の教皇が在位を開始したとき、それは終結した。その時点で、神殿の試練が始まった。

次稿でもこれらを論じ続け、「250」年を、根本的な試練が現教皇をもって終わったという私たちの同定を支持する証左として用いる。